20　刀

古緑空白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２０　刀

【Ｎコード】
Ｎ２４９５Ｖ

【作者名】
古緑空白

【あらすじ】
外法の刀。狂気の産物。そして、女は――

２０　刀

刀を、作っている。

金属同士が打ち鳴らす、硬質の音楽。それが何合も続いている。

男は見ている。それが刀と呼べるものに次第に近づいていることにも気づいている。

男は刀鍛冶師だった。連綿と続く彼の家の当主は皆、領主に仕えている刀工である。

戦国時代の刀はもっぱら芸術品であった。戦場の主役は槍であり、弓矢であり、そして南蛮からもたらされた鉄砲であった。

軍記物語に登場する一騎打ちなどもはや廃れ去り、個人の活躍よりも集団の武勲の方が重きを置かれるようになり、一騎当千などという言葉は消えてなくなった。

男は、それが悔しい。

男は刀が好きだった。廃れたと語った軍記物語で刃を打ちならし、首を切る様が好きだった。

好きだからこそ自分が何を作っているのか解らなくなることがある。芸術品、その言葉で割り切れればよかったのだが、男の欲は深い。

もっと血を、もっと肉を、もっと骨を――啜り、噛みちぎり、砕け。

戦の主役であって欲しかった。芸術品などという武器の規格の中でも最悪の称号を与えられる不名誉を雪いでやりたかった。

それを常々思っていることだった。

だが、男は変わった。

変わった、なのである。吹っ切れたや、自分の中でけりがついたということではない。

負の方向に変わったのだ。
――もうすぐだ。
槌をふるいながら聞くこの音楽が、男にとっては産声に聞こえた。
――もうすぐ、生まれる。
そうでなければ――
「わが子を贄にささげた意味がない――」
くつ、と笑みがこぼれる。それはありきたりな言葉で飾れば、狂人の笑み。瞳には刀しか映っていない。
成程狂いというのはこういう感覚か、男はその事の小さな歓喜を覚えていた。
唐土の外法にこういうものがある。
とある王が壊れない鐘を所望した。匠はその命に応え、懸命に作り上げようとした。だが、しかし物というものは壊れるように出来ている。壊れにくいものは作り上げられたが、壊れないものは作り上げることは出来なかった。
そして、その匠は決心した。
人身御供。
妻を贄にささげて見事鐘を作り上げたのだという。
男はその話を子供のころ半分に聞いていた。子供の心では、その話は恐ろしい話に聞こえた。だが、今なら解る、男はそう思う。
その匠は畜生に落ちてでも作り上げたい物があったのだ。作り手というのはバカなのだ、刀や鐘に限った話ではない。すべて、そうすべて作り上げるということはバカでなければできない。
男が作ろうとしているのは、妖の太刀。命ある刀。考え話す剣。
だから、その声が聞こえた時女の腹から生まれたときに挙げる産声のように聞こえた。
――おとさん？
男は、錬りあげながら笑っていた。
「そうだ、お前の父だ」
悦び、嗤う。

たどたどしく、語りかけてくる刀と話しながら、男はこの刀で最初に切り血を吸わせる相手を思った。
それは――

◆◇◆◇◆

女はここの領主に仕える鍛冶師の下女であった。だが、ただの下女、というわけにはいかない。
男と女の仲でもあった。前妻は既に死んでおり、更に子供にも恵まれなかった。だから、女は自分を正妻にしてくれるものだと思っていた。既に子供も産まれている。
だが、女が得たものは追放というものだった。その離縁を領主には不貞を働いたということで申し出ていた。子供に罪はないということで男に奪われた。
子供に対しての愛情は、お世辞にもあったとはいえない。むしろ子供に自分に対しての愛情を奪われたと憎悪している。
何がしか、復讐してやらなれば腹の虫がおさまらない。女はそう考え子供をさらおうと考えた。
当時、家は長男が継ぐという世襲制度が浸透していた。その為農家であろうが、工匠であろうが長男を奪おうとするのは大罪であった。
それでも女はやろうと思った。打算がなかったわけではない。この地でもう少しで戦が始まるということはもっぱらで、その戦禍から逃れようと農民たちが逃げようとしている。その混乱に乗じれば、子供の一人や二人さらうことは問題はないだろう。
そう思って女は男の鍛冶場にもぐりこんだ。
違和感は入る前に思った。槌をふるう音がしないのだ。そして、梅雨の湿気だけで鍛冶場独特の炎の熱さもまた感じなかった。
まさか、逃げた？
考えられなくはない。正直なところのこの国の兵は弱兵で戦に勝

つとは夢のまた夢と言ってもいいだろう。
だが、人の気配はする。
そろり、そろりと足を密やかに運ぶ。
女は嫌な汗をかいていた。熱気にあふれていた鍛冶場を思い出していたのと、昼間だというに暗いこの場所に言いしれぬ不安がよぎっていたからだ。
そして、女は男を見つける。
だが、それは男であって、男ではなかった。人間であって、人間にあらず、それは物であった。
女は腰をぬかした。視線は男が作り上げたと思しき刀へと向けざるを得なかった。
それは男の首を貫き、血を啜り、ろうそくのわずかな光に照らされ妖しい様だった。
それから、一刻ほど混乱は止まなかった。そして、ようやく気付いたときに女は思い出していた。子供は、子供はどこだ？
男と別れ今の時まで換算すれば子供は乳離れした頃だ。他に下男下女はいなかったから子供は今や独りきりのはずだ。
どこか、探そうとしたら声がした。
「だ、だれだ……」
声音は子供のもの。考えれば我が子のものと考えてもいいだろう。だが、ここは死体の転がる場所。普通の子供がいよう筈はない。
遠く、鳥の鳴き声が聞こえる。
ここには刀と自分と男だったものしかいない。
だが、声はする。
そして、気付く。
我が子は――刀になったのだ。
――おかあ、さん。

◆◇◆◇◆

――その後、その女と刀を見た者はいない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2495v/

20　刀

2011年7月28日03時33分発行